

研究タイトル：想像が支える論理ならざる論理


氏名：	小田 昇平 / ODA Shohei	E-mail：	soda@kochi-ct.ac.jp
職名：	特命助教	学位：	修士(藝術)
所属学会・協会：	美学会、文藝学研究会		
キーワード：	想像、類比、身体、記号・言語、映画作品研究		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> ・美学・藝術学に関する研究 ・哲学・思想史に関する研究 		

研究内容：
◆研究概要

研究の軸は、フランスを中心とした思想研究と藝術作品研究とのふたつです。

思想研究としては、フランス啓蒙哲学の中心人物のひとり、エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック (Étienne Bonnot de Condillac, 1714-80) の思想から出発し、思想史上の問題に取り組んでいます。

藝術作品研究としては、セルジュ・ゲンスブール (Serge Gainsbourg, 1928-91) 監督作品を読解するとともに、映画作品読解の方法論を模索する、映画作品研究を行っています。

◆研究テーマと成果の例
(1) 思想研究

西洋哲学の歴史を紐解いてみると、「こころ」が「からだ」よりも、いいかえると「知性」が「感性」よりも、上位に置かれていることがわかります。また、「初にロゴスありき。」というように、「ことば」が重用されていたこともわかるでしょう。こうした考え方は、西洋のふたつの柱たるヘレニズムとヘブライズムとが渾然一体となり、作りあげてきたものです。しかしながら、わたくしたちのもっているより根源的な欲求はといえば、睡眠欲、食欲、性欲に代表される「からだ」が要求するものです。また、握手、抱擁、性愛といった身体による、「ことば」によらないコミュニケーションはわたくしたちの種を維持するために欠かせません。このような不等式は、はたして正当なものでしょうか。

18 世紀フランスの思想家であるコンディヤックは、わたくしたちの知性が成立するきっかけが「感覚」に、それも「視覚」や「聴覚」ではなく「触覚」にある、というユニークな主張をしました。にもかかわらずコンディヤックは、「論理学者」として名を馳せ、事実『論理学 La logique』(1780) という著作を残しています。「感覚」から論理のような「知性」の粋をも導き出す、かようなコンディヤックの思想から出発して、「知性」と「感性」、「こころ」と「からだ」といった二元論の克服をはかっています。成果としては、コンディヤックの論理 *logique* は想像 *imagination* によって支えられている、論理ならざる論理であることを明らかにしました。現在は、この論理が類比 *analogique* へ移行することが可能かどうかの検討と、また最新鋭の科学の知見を背景にもつ、現代の哲学との比較検討とを行っています。

(2) 藝術作品研究

一般に感性的なものと解される藝術ですが、その中でも映画、とくに劇映画はきわめて論理的に、その最小単位である「シーン」を組み立てることでつくられています。近親相姦や露出趣味など、スキャンダラスなモチーフに彩られた作品を残しているフランスのアーティスト、セルジュ・ゲンスブール監督作品の読解を続けるとともに、映画作品読解の方法論を模索する、映画作品研究を行っています。

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	